

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.186
2019.3.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第26回 ● 沼田頼輔の「把手の分類」考

坪井正五郎の「異地方発見の類似土器」は日本考古学近代化の曙において未だ見ぬ型式学の構築過程として極めて衝撃的なアルゴリズムを開陳する。形態や装飾等多くの属性が類似する3個体の完形土器の分析を通して改めて突起の形態的変差に着目する。その変差のある形態を「拳形」と分類し、全体が類似する土器は突起も類似するという相関性を導出した上で、次には「拳形」に類似する突起のみの破片に対しても、恰も個体標本と同等に類似度による順序分析を行う、という全体と部分の相関モデルを明確に示す手続きに特徴がある。加えてその手続きは本邦初の学史的先端性を備え、土器の新旧を順序として分析し得る型式学の曙光と認められることから、本連載では「類似度順序形態学」と命名した。それほどまでに理論的な手続きであるアルゴリズムに拘るのは、坪井正五郎も心得る層位学による成果が未明の往時では、理論的に新旧を導出する手続きは類似間の順序策定以外に存在しないことを示すためである。

学史的な意義も解説しておこう。前にも触れたようにモースの大森貝塚は標本性に優れ、早速、佐々木忠次郎・飯島魁両氏の陸平貝塚発では大森貝塚との比較形態学が進められ、薄手の「大森式」と厚手の「陸平式」が年代区分(「相異の土器区分論」)として提起され、新古の「土器区分」が考察される。この「土器区分」は八木奨三郎・下村三四吉の阿玉台貝塚の発掘成果でも追認され再論に至るが、坪井正五郎は新古の確認が未明との立場を貫き、山内清男の指摘の通り、古い「大森式」と新しい「陸平式」という新古の「土器区分」には与しない。ここに新旧の順序を厳密に導出する「類似度順序形態学」を新しい型式学として開拓し、自らの「土器区分」の立場を明確に表明したのである。

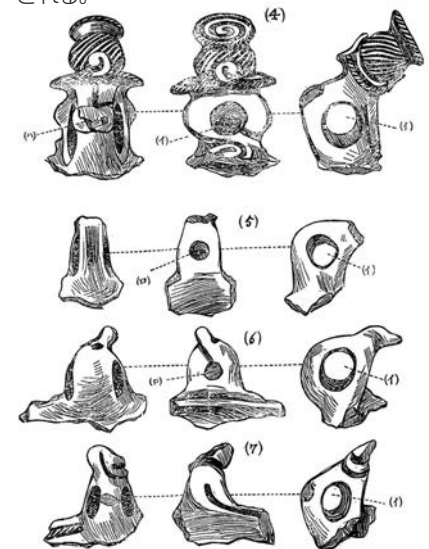
この坪井正五郎のアルゴリズム構築とは別に、沼田頼輔の4回連載論文となる「把手の分類」が登場する。加曾利B式例の詳細は順次触れるが、その名の通り形態学として特定の「把手の分類」に「形式」概念を付与する。「形式」名称には出土数や造形面で優位な遺蹟(跡)名に対して付与し、例えば「沼部式」と呼び、また注目すべき「大森式」では単純素朴な形態から徐々に複雑な構成へと変化する変遷を仮設し、その順序を「第一期」、「第二期」、…、「第十二期」とする分類を開陳する。他方で縄紋式中期中葉の「都式」では人面形状の模倣を始点とし、以後省略による変化様態を順序とするシーケンス等、「把手の分類」毎に独自の論理で始点を特定し、順序を指定する試行はあまりにも独断的で願望的である。前提条件を整備する坪井正五郎の型式学とは似て非なる手続きではあるが、アルゴリズムに疎い少壮においては誤解に傾く節が無い訳では無い。

また、『大田区史』では注口付土器の把手「形式」である「沼部式」と「御所見式」の抽出、及びモースに続いて大森貝塚の全ての突起を本格的に分類した業績に触れない事情も鑑み、併せて沼田頼輔自身も中途半端を反省し、本来あるべき分類を懇願しており、今日の型式学の眼で再吟味する。

沼田頼輔が4回連載の「把手の分類」で「形式」分類したのは、「瓶岡式」(亀ヶ岡式中葉以降)突起、「大森式」突起、「沼部式」把手、「御所見式」把手、「都式」(勝坂式)把手の5「形式」のみで、前置きで時間の制約による悉皆調査の不備を明記する。本連載では加曾利B式の「大森式」突起、「沼部式」把手、「御所見式」把手の提示資料に限定し、型式学の俎上に乗せる。「大森式」突起はモースが注目する第15図を含む深鉢の突起の殆どを網羅し、

「沼部式」把手より新しい加曾利B1式の「御所見式」把手は「大森式」突起の最古階段に比定される。

そこで加曾利B1式初頭の「沼部式」把手から順に再吟味する。「沼部式」把手は第30図(1)(2)(3)及び第31図(4)の4個体に共通する特徴を以て「形式」分類され、(1)(4)が東京都下沼部貝塚、(2)が西ヶ原貝塚、(3)が東京都権現台貝塚であり、故に多数出土の下沼部貝塚により命名される。共通する特徴は「其の概形「ククリ」猿の如きもの」で「必ず左右に貫通せる孔と又其の裏面にもこれと直角に貫通せる孔を有するを常とせり」、「把手の頭部には必ず多数の条痕を刻せるか如き異様の形状をなし其他把手の背面に一若しくは一以上の突起を有するを常とせり」、「多く土瓶形」と要点が強調される。更に今日の型式学として重要な属性は表の第一項目である「分類の種別」にあり、4個体は4種類に細別されるものの、相互の関連は不問に付される。



▲第31図 「沼部式」把手と「御所見式」把手

※巻頭連載は隔月です。次回は太田裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 沼田頼輔の「把手の分類」考(第26回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第19回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第179回) 藤田慎一 …3
■考古学者の書棚 「天文の考古学」 乗本愛実 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第19回) ————— 間壁 忠彦・間壁 霞子

5. 富比売の出現(天平宝字七年銘の墓地買地券)(2)

真偽の不明なものを、博物館施設が、そのまま展示してよいものかどうか、「矢田部益足之買地券文」についても常に気がかりで、多少ながらも検討を続けていた。こうした中で、先々回この欄で話題とした、安養寺瓦経の中で応徳三年銘の願文を発見した。これは平安時代の新資料として、東京大学史料編所へ報告と思い、同時に竹内理三先生に、「買地券文博」の拓本を送り、改めてのご教示をお願いしたのである。館開館から9年ばかり経った1964年2月のこと。折り返し和紙に毛筆で達筆の丁寧な御返事を頂いた。

すでに半世紀以上の歳月が経っている1964年の手紙を広げると、全文をそのまま載せたいような内容。安養寺瓦経願文のお礼、塙の拓本のお礼、その他..大先生にとっては、全く面識も無い私どもは、当時まだやっと30歳というような業績も知られない若造である。しかし学問のことでは不躰な突然の便りにも、丁寧な返事がいただけたことに、私たちも生涯見習わなければとおもったことであった。

ただ本題の買地券についての内容では「..この券文はお察しの如く、永山氏の金石文にて承知しましたが、同時代のものとしても類例が無いため、真偽の判断に苦しみ割愛いたしました。ご患贈の拓本を見る限り、やはり字体といい体裁といい疑わしいものの様に感じました..」とあった。その時はやはりそうだったかと思った。どのような専門の世界であっても、全く類例のないものの事例に対しては、厳しい検討の必要なことも、改めて心に刻んだことだった。しかし何のために、意味の分からないような偽物を作ったのか、吹っ切れない思いも残った。

岸先生のところを尋ねるまでには、なお15年の歳月がある。その間、日本各地では景気向上の波に乗って、驚くような開発と共に遺跡破壊とその調査がどのようにおこなわれたかは、ここで話題とすることではないが、我々みんながそれぞれに体験したことだろう。奈良における都城の調査も進んでおり、その報告書も出る中で、奈良時代文字の実物など、特に目にしたことも無かった私どもも、多数の出土木簡の上で文字の実態を見得るようになった。その文字がああ買地券の文字に良く似たものに思われだしたのである。

この資料は発見時以来、内容の釈文が充分に出来ていない状況も、本体の真偽に関しては大きな問題ともいえた。実物で見ても、拓本で見ても、自然の摩滅と破損に加え、よく読めぬためにより表面が傷付けられたと思われる状況で、容易に新しく釈文ができるとも思われなかった。しかし手許にある資料であり、今一度、初心に帰ってと暇々に解読を試みた。あの瓦経を判読した時のように、全く文字を意識しないで、そこに残されている痕跡をそのまま書き写していくことに専念したのである。

丁度その頃、現在は橿原考古学研究所所長である若い日の菅谷文則氏が立ち寄られた。当時はまだ現在のように、各地に考古館や、研究機関が整っていない頃、倉敷考古館には、各地の考古学研究者がよく立ち寄られるのは日常のことだった。ご本人は今では全く記憶に無いことかもしれないが、この時た

またまこの資料が話題となり、奈良の各地の遺跡出土木簡に関して、京大の岸先生と昵懇であった菅谷氏から、岸先生に相談してはというような話になったのである。

そこで1979年5月、学会にいく途上だったが、突然の電話でお願いしての訪問に、岸先生には気軽に応じていただけた。その時、従来の釈文は勿論、奈良時代文献に関しては全く素人である私たちの、改めての二面を付き合わせての釈文も持参したのである。それは次のようなものであった。(「」は改行部分。二面の資料は夫々改行部分が異なる。良好な方の例)

〈備中国下道郡八田郷戸主矢田部石安「口白髪部毗登富比売之墓地以」天平寶字七年々次癸卯十月十六日八田郷「長矢田部益足之買地券文〉

先生が直ぐ注目されたのは人名の姓にあたる「白髪部毗登」部分だった。この部分が、従来の読みでは全く文字にない化け字が描かれ、旧来の釈文はみなそれによっていた。詳しくは『倉敷考古館研究集報 第15号』(1980年4月)に。この中には岸先生の論考も掲載しておりそれによって頂きたいが、この中の『毗登』は、天平勝寶9(757)年から宝亀元(770)年の間だけ、『首・史』(おびと・ふひと)という聖武天皇や藤原不比等の名を避けて(毗登)と書くような命令に依った事であろうが、定まった時の法令など文書には見られず、こうした事実は当時の官僚や知識人以外は、認識されていないと言えるところのこと。買地券の天平寶字七年は763年、丁度その間だ、との先生の説明を聞いて、読み替えた当方が驚いたようなことだった。

その他にも、文字から見ての状況証拠は、全て「可」のようであったが、先回述べた竹内理三先生の手紙の内容も伝えていたので、類例のないこともあり、いまま少し検討して後日にということであった。じつは岸先生は極めて史料には厳格で、「石橋を叩いても渡らない」との噂も伺っていたことから、全体的には、これは大丈夫なのだとの思いは強くしていた。

そうして半年ばかりの後、全くこれも偶然の事ながら、先回の冒頭のように、先生からの電話を頂くことになったのである。

間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年 同上館長
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年 岡山県立操山高等学校卒業
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

Uレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 179

中津居館跡 ～山口県岩国市

藤田 慎一

私が紹介する遺跡は、現在調査している山口県岩国市にある中津居館跡です。この遺跡は錦川河口部の三角州上に立地し、規模は南北130～170m、東西120～140mで周囲には土塁が巡っていると考えられていることから居館跡と考えられている。近世岩国の地誌である『玖珂郡志』や『享保増補村記』、そして地元の伝承では「朝日長者」あるいは「椿長者」の屋敷と伝えられている。調査は岩国市内の遺跡で唯一、複数回の発掘調査が行われており、現在14次を数える。

この遺跡は平成9年に岩国市文化財審議員であった棟安唯夫氏が文献をもとにして踏査を行い土塁の規模を明らかにし、これを受けて山口県教育委員会、岩国市教育委員会の現地調査により土塁の良好な残存状況が確認され、周知の埋蔵文化財包蔵地となった。このあと平成20年度から27年度の確認調査では土塁の状況および4間×5間以上の大型掘立総柱建物跡、土師器一括廃棄土坑、井戸跡が検出された。中世前半の居館跡として認識されるに至り、さらには平成24年度の調査では一括出土銭埋納遺構が確認された。銭は口縁部を欠いた備前甕を土坑に据えて、銭を納め杉板で蓋をした状態で出土した。銭は4万から5万枚の銭が納められていると推定され、各々八貫文や十貫文でまとめられていた。このような出土状況は当時の貨幣流通、使用のあり方を考える上でも重要な発見であり、発掘された日本列島2016年展にも出品されている。



▲一括出土銭埋納遺構(岩国市教育委員会 提供)

遺物は近世遺物もあるが、中世のものとして土師器(杯・椀・皿・鍋)、瓦器、中国陶磁(青磁・白磁・天目)、中世陶器(常滑・備前・亀山)、金属製品(鎌・釘・鉄滓・銭貨)、木製品(井戸杵部材、箸状木製品、折敷、付け木、柄杓底板、下駄部材、不明木製品)、石製品(砥石)、植物遺体(炭化種実)、動物(貝)が出土している。

確認調査では上記の遺構、遺物が確認されており、中世前半の居館の様相を伺うことが出来る調査成果であるが、20,000㎡を超える遺跡面積の中ではわずかな面積での発見であるためまだまだ全体像がはっきりしない居館跡である。

居館の主については居館跡の北側にある白崎八幡宮の棟札等から弘中氏が関係していると推測されている。

そして、確認調査の最後の年度となる平成27年に私は岩国市教育委員会に採用され、平成28年度から道路建設や個人住宅建設に伴う発掘調査の担当として従事している。とくに道路建設に伴う発掘調査は、これまでの確認調査とは異なり遺跡内でも広い面積の調査であり、確認調査では判明しなかった遺跡の様相が明らかになってきている。成果として大きなものは写真の石垣である。石垣は土塁と考えられている遺構に付随するもので、周辺で採取できる溶結凝灰岩や花崗岩を利用して直立気味に積み上げられている。石積については時期的な検討は必要ではあるが、これまでの調査で土塁と考えられているものは堰堤ではないかと疑問をもつようになったが、なかなか調査の中でこれまでの調査成果の先入観があり、こうした考えに至るまでかなりの時間が掛かってしまった。その後の調査で土塁についても基底部から敷業工法の検出もあり、ようやく堰堤そして、全体が居館と考えるよりは輪中のように堰堤に囲まれた集落ではないかと遺跡の性格の解明に一步踏み出すことになったのである。

継続して発掘調査を実施している遺跡はこれまでの調査成果というものが付きまとう、まして土塁、礎石建物、廃棄土坑、埋納銭と大きな成果が出ている状況では先入観がどうしても大きくなる。石垣の発見はこれまでの調査成果、遺跡の評価に対する疑問、再検討のきっかけとなった。

最終的にはこの遺跡は全体を居館跡と考えるよりは集落跡で内部施設として館を包括しているのではないかと想定している。これまでの調査の成果も大事にしつつ、先入観に捕らわれず調査で確認された遺構や遺物と向き合っていく、調査の初心を思い出させてくれた中津居館跡。今後の調査でも、そのことを忘れず今後の課題となっている土塁か堰堤なのかの機能判断や年代、石垣との関係性、立地の問題、居館内部の構造の解明と中津居館跡の課題を明らかにしていき、まだまだ分からないことが多い、岩国の中世を少しでも明らかに出来るように心がけていきたい。



▲土塁あるいは堰堤に付随する石垣(岩国市教育委員会 提供)

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは平井耕平さんです。

考古学者の書棚

「ものが語る歴史シリーズ^{③⑤} 天文の考古学」

後藤 明／同成社(2017)

乗本 愛実

他の書籍を買いに書店へ行った際、本棚を物色しているとそのタイトルにとっても興味を引かれた書籍があった。それが、本書である。まずその理由を話させてもらいたい。私は、小学生のころ世界遺産大図鑑をみて、歴史が好きになっていった。同時期に歴史と同じくらい好きだったのが星をみることだった。よく星座早見表を片手に夜空を見上げていた。また、多趣味で楽しみを共有できた父とともに望遠鏡を買い星だけでなく月の観測をしたり、プラネタリウムを観に科学館へ行ったりもしていた。今では、夢中になっていた時期のことはほとんど忘れ、星をみることもなくなったのだが…。そんな幼いころに興味をもった二つのことが重なっている、そう思ったからである。また、ストーンヘンジやナスカの地上絵が星座と関係している、天文観測のためのものだった話を聞く。実際、エジプトの三大ピラミッドの並びがオリオン座にと重ね合わせて考えている内容をテレビ番組で観たことがあったためである。

本書は古代遺跡と天体との関係について考えていく構成になっている。

- 第1章 概念や名称
- 第2章 考古学と天文学 —その関係の歴史—
- 第3章 民族誌に見るスカイロア・スターロア
- 第4章 考古天文学の現状
- 第5章 古代人と天体

第1章では、関連する分野名称の整理、関連する天文学の知識について論じられている。本書では、「スカイロア」という言葉が第3章で大きく取り上げられているが、「ロア」とは「民間に伝えられたこと」を意味し、「フォークロア」という昔話や言い伝えのことである言葉にも使われている。「空について伝えられたこと」という意味であろうと考えられる。

第2章では、イギリス、北米地域の古代遺跡と天文現象の学史についての整理が行われている。近年の動向としては、イギリスで行われたシンポジウムの報告で、旧大陸を扱った本は緑色(草原のなかにたたずむストーンヘンジのイメージ)、新大陸を扱った本は茶色(発掘時の土のイメージ)が使われている。それに加えて青い天文(考古)学を提唱しようとする動きがあることが挙げられている。さらに、天文の考古学が現代の考古学理論においても意義についても論じられている。

第3章では、民族誌における天文現象と人類の生活や儀礼との関係について論じられている。天文現象は、多くの民族において、季節や方位(=時空間認識)の基本であることが紹介されている。世界の民族誌のなかでプレアデス(おうし座の散らばる星団)は重要な季節の指標となっており、注目

するのは世界的な傾向となっているという。日本の事例を挙げると、プレアデスは「すまる・すばる」と呼ぶ文化圏と「ムリブシ」と呼ぶ文化圏があり、「すばるまんどき粉八合」ということわざがある。「まんどき」とは「南中」を意味し、このときまくと1升の実から8合の粉がとれるほど取れるという意味である。このため、中空に達したのを目安に蕎麦などの種まき時としている場所は多いという。

第4章では、世界各地の代表的な天文学的な遺跡について概説されている。地域に偏りがあり、インドや中国の部分は空白でありもう少し内容がほしいところではあったが、有名な遺跡から、あまり名の知れていない遺跡が取りあげられており、文化圏ごとにアプローチの仕方が違うことがうかがえる内容となっている。第3章と同じく日本の事例を挙げる。日本先史考古学において天文学的な分析としては、秋田県大湯町にある環状列石で縄文時代の日時計といわれてきた遺構である。野中堂と万座の2つの遺構が知られており、これに注目した川口重一氏は、列石の配置は夏至の太陽の没入地点を意識して作られていると考え、天文学者に夏至の太陽の出現方位を計算してもらっている。また近年、天文との関係で議論が盛んなのは、三内丸山遺跡であるという。縄文時代の集落遺跡として有名だが、この遺跡にある3本ずつ並んだ巨大柱の列をした構造物、大型掘立柱建物跡の主軸が、夏至の太陽の出現・冬至の太陽の没入に向かっていているという意見があるという内容は興味深い。

第5章では、人類にとって天文現象がどのような意味をもつのかということを問う内容になっている。

以上、本書の内容を列挙してきたが、本書は、古代遺跡と天体との関係について神秘的なものとしてみられることは、遺跡を天文学的な知識から解釈することで無意味なことではということを示しているものだと感じた。

本書のなかで著者は、古代遺跡と天文現象との関係を追究する国際学会にて、この分野における日本の学術的な研究がアジアの国々のなかでも著しく立ち遅れていると述べている。確かに、日本で研究されているということを知ることがない。考古学と天文学、文系と理系というジャンルの違った知識が必要なため、発展させていくには難しい面が多いためなのかもしれないが、今後が期待されるような一冊である。

アルカ通信 No.186

発行日	2019年3月1日
企画	角張淳一(故人)
発行	考古学研究所(株)アルカ
	〒384-0801 長野県小諸市甲49-15
	TEL 0267-25-0299
	aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp